

2026（令和8）年度  
総合型選抜(10月2期)  
帰国子女・外国人入学試験

総合文化学部

小 論 文

10時～11時

受験についての注意

試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題本文は**3**ページである。試験開始後、問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
3. 解答用紙はすべて**HBの黒鉛筆**または**シャープペンシル**で記入すること。
4. 試験開始の前に、解答用紙の定められた位置に氏名、受験番号および領域名を記入すること。なお、国際文化領域志願者は専攻言語を○印で囲むこと。
5. 解答は解答用紙の指定された場所に記入すること。余白、裏面には何も書いてはならない。別に下書き用の用紙を配付するが、使用については自由である。
6. 筆記用具、受験票以外のものは、かばん等に入れ、机の下に置くこと。
7. 試験時間中に無断で退場することはできない。
8. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子（試験問題）および下書き用紙は持ち帰ってよい。

次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。 [100点]

「私は旅や冒険が嫌い」なのに、「いま私はこうして自分の探検旅行のことを語ろうとしている」という不思議な書き出しではじまる『悲しき熱帯』は、一九五〇年代のフランスで幅広い読者の支持を受けた。フランスの文化人類学者であるクロード・レヴィストロースがブラジルで行なったフィールド・ワークを基に書いた「学術書」であるこの本が、それほど広く読まれたのはなぜだろうか。それは、自分たちの知らないブラジル奥地に住む部族との出会いが、彼独自の手法で興味深く書かれてあり、彼のその「異文化」体験に多くの人が引き付けられたからに違いない。「異文化」に対する憧れが、多くの読者をこの本へと導いていったのだ。つまり、レヴィストロースと読者は、一緒になって、自らの視点を基準に彼(女)らを「異文化」と名づけたのである。

だが、当時の彼(女)らを私たちは一概に非難することはできない。私たちも自分にとって(知らない／わからない文化)を「異文化」という枠組みに押し込んでしまっているかもしれないのだ。南米やアフリカの山奥に住む部族を訪ねるテレビの旅行番組を楽しんだり、「エスニック料理」やエキゾチックな雑貨を消費する私たちは、私たちにとっての「異文化」を自らの視点で定義している。クリフォード・ギアーツが言うように、「異文化」とは支配的文化に属する者の視点から観察されたものがそれとして記述されたものなのかもしれない。したがって、「異文化」が語られるときには、誰がそう名づけているのか、それをどのように語っているのかを見ていく必要がある。

E・サイードは、西洋社会が研究される対象として非西洋社会である「オリエント(東洋)」を表象することの暴力性を指摘した。研究され、描写される側の「オリエント」は、いわば西洋の植民地主義、あるいは新植民地主義によって支配される人びとなのである。サイードは、こうした「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」を「オリエンタリズム」と呼んだ。

このようなオリエンタリズムと似た構造は、日本と他のアジア諸国との関係にも見出せる。日本がそうした国の人びとを「他者」として見てきたことは、あらゆるところで指摘されてきたのだ。例えば、中国や韓国、北朝鮮に対し、戦後六〇年以上たった今でも正式な謝罪をしていない日本政府の態度や、マス・メディアによる中国や北朝鮮の報道のされ方な

どこにこうした眼差しが如実に現われている。明治政府が掲げたスローガンである「脱亜入欧」もそうである。遅れたアジアから脱し、進んだ欧米諸国の仲間入りをすることをめざそうというのがこのことばの意味である。

アジア蔑視と欧米への憧れが反映されているこのスローガンだが、後半の「入欧」には複雑な力学が働いている。欧米の仲間入りをする事、すなわち自らがその一員となるということは、相手の視点を通して自らを見つめなおすということにもなる。しかし、結局は欧米人と同じようになることはできない。いくら西洋的価値観を受け入れ、西洋人のように振舞ったとしても、同じにはなれないのである。そうになると、自らを卑下するようになったり、逆に、日本的なものへと回帰し欧米的なものを忌避するような行動を取るようになるかもしれない。あるいは、他のアジア地域をさらに蔑視することによってそのいらだちを解消しようとするのかもしれない。いずれにしろ、そこには憧れと軽蔑が複雑に同居しているのだ。

西洋が自分たちの文化よりも勝っているのではないし、他のアジア文化が劣っているわけでもない、すべての文化は固有の価値をもっており、それぞれの文化をお互いに尊重すべきだ、と主張するのが文化相対主義である。多くの文化が西洋からの視点で「野蛮人」として描かれてきた反省を踏まえ、それぞれの文化の独自性を認める態度の必要性を文化人類学者であるフランク・ポアズが説いたのが、このことば／概念の起源であるとされている。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて登場したこのことば／概念は、画期的なものであった。

文化相対主義の意義は、自らの価値観や見方に捉われてしまっている私たちに反省を促し、他者が自分とは異なった存在であること、その他者と対話することが重要だということに気づかせてくれた点にある。つまり、文化相対主義は自己文化中心主義からの脱却への可能性を秘めた考え方といえるのである。

しかし、この文化相対主義には様々な批判が加えられてきたことも確かである。例えば、すべての文化的価値を認めるとすると、割礼といったような女性の人権を侵害するような慣習も認めなければならないのか、といった議論である。また、文化相対主義には、規範、つまり私たちが当たり前だと思ひ込み、それに従って行動しているものに対する批判力が弱い、という主張もある。そうした批判を一つひとつ吟味していくことはもちろん大切だが、太田好信が言うように、文化相対主義がもっていた批判力、つまりポアズが生きた世紀の変わり目に主流であった西洋中心主義からの脱却を意図したこの考え方のあり方から学べることは少なくない。

（池田理知子『よくわかる異文化コミュニケーション』より）

問1 文章全体を要約せよ。

問2 右の文章に対する自分の意見を、総合文化学部で自分が学びたいと考えていることと関わらせて、まとめよ。

